



Team
Dainan

八千代市立大和田南小学校
《校長室だより》
令和3年度 第33号
令和3年 12月15日

えがお学級・3年生 和太鼓体験教室

～文化庁 次代を担う子どもの文化芸術体験事業～



12月13日(月)～15日(水)の3日間、茨城県ひたちなか市を活動拠点としている創作和太鼓「来舞・デュオ」の過足雅之(よぎあしまさゆき)さんと照沼啓子(てるぬまけいこ)さん来ていただき、クラスごとに和太鼓体験教室を行いました。

今回の体験教室では、和太鼓のうち、長胴太鼓と桶胴太鼓という2種類を用意してくださいました。ひと口に和太鼓と言っても、種類や大きさ、形によ

って音色が変わるそうです。また、同じ大きさ、同じ形でも、皮の種類や木の材質、そして、普段私たちが目にすることのない内側の削られ方によっても音色が変わるそうです。今回子供たちが使った長胴太鼓は、1本のケヤキの木をくり抜いて作ったものです。また、桶胴太鼓は、杉板を桶状に組んだものです。どちらも牛の皮を使っています。

日本の伝統文化の一つでもある和太鼓ですが、材料となる国内産の良質のケヤキやクスノキなどが手に入りにくくなってきているそうです。海外産の木もあるそうですが、日本の気候で育った木の方が音も良く、何よりも長持ちするそうです。また、新型コロナウイルス感染症の影響で、和太鼓づくりの職人さんの廃業も出てきているそうです。このままでは、伝統文化の継承に影響が出てくるかもしれません。過足さんたちは、現在、太鼓づくりの職人さんたちと100年、200年後の未来を見据え、植林活動にも取り組んでいるそうです。

和太鼓は、鍵盤ハーモニカやリコーダーなどと同じように楽器の仲間ですが、大きな違いの一つは、楽譜がないことです。和太鼓は、口唱歌と言って、楽譜の代わりに、たたくリズムを言葉にして歌うように覚えるそうです。今回の和太鼓体験教室でも、この口唱歌を使い、言葉と体でリズムを自分にしみ込ませていました。口唱歌は、子供たちの好きなものを組み合わせさせて使っているので、クラスによって違ってきます。どのフレーズも覚えやすいので、子供たちは、短時間でたたけるようになりました。過足さんの考えた口唱歌は、子供たちの学びに火をつける魔法の言葉だと思いました。

和太鼓の演奏は、体力・集中力・礼儀作法などが必要とされるそうです。ひとクラス1時間20分という限られた時間の中で、指導者の過足さんと照沼さんは、子供たちの力に応じて指導してくださいました。

はじめは、ぎこちない動きの子供たちでしたが、学習の終わり頃には、どの子も心を開き、和太鼓の奏者になりきってバチを振り下ろしていました。子供たちにとって心に残る経験となったに違いありません。





左の写真は、ケヤキの木をくりぬいて作った長胴太鼓を特殊な工作機械を使って真っ二つにしたものです。

ケヤキの木はとても固く、通常ののこぎりでは歯が立たず、皮まできれいに切れないそうです。

職人さんは、太鼓のたたき手の要望(〇〇のような音が出る太鼓)に合わせて、内側をくりぬくそうです。くりぬき方によって音が変わるそうです。

向かって左がケヤキの木をくりぬいて作った長胴太鼓です。この太さの木になるまで100年以上の歳月がかかるそうです。

長胴太鼓は、牛の皮をぴんと張り、びょうで留めています。

右側が杉板を桶状に組んだ桶胴太鼓です。上下の牛の皮をひもで引っ張り留めています。



過足雅之(よぎあしまさゆき)さん

照沼啓子(てるぬまけいこ)さん

授業の最後に、音色の違う3つの和太鼓を使い、演奏を聴かせていただきました。音の波が、体の中にしみ込んでくる迫力のある演奏でした。

和太鼓の音を聴いていると何だか「頑張ろう！」という気持ちになってきます。和太鼓には、人の気持ちを鼓舞する不思議な力があります。